

自閉症児・者のきょうだいにおける心理的成長過程に関する研究(1)

～きょうだいの障害理解や悩みを中心に～

小田 憲子 (神戸女子大学社会福祉学科) 井上 雅彦 (兵庫教育大学発達心理臨床センター) 松岡 瑞幸 (大阪府健康福祉部)
KEY WORDS:自閉症、きょうだい、心理的成長過程

(目的)本研究は自閉症児・者(以下、同胞とする)のきょうだいと母親を対象に、きょうだいが同胞や母親に対して持つストレスや不安について面接を行い、母親とのかかわりの中できょうだいが乗り越えていった心理的成長過程について明らかにする。今回の報告では主に、きょうだいの障害に対する理解や悩みに関する発達の影響について分析することを目的とする。

(方法)対象:自閉症児・者を持つ母親(41～59歳)とそのきょうだい(15歳～35歳)を1組として、16組を対象とした。きょうだいの性別は女性7名・男性9名であった。年上のきょうだいは11名(女性5名・男性6名)・年下のきょうだいは5名(女性2名・男性3名)であった。同胞からみて異性のきょうだいは4名(男性2名・女性2名)だった。母親については、今までの子育てについて話をすることに対する抵抗の有無、きょうだいについては、幼い頃の同胞との関わりや両親との関わりを話すことに対する抵抗の有無について確認し、承諾を得た者のみとした。

手続き:あらかじめ決められた質問項目を中心とした半構造化面接法により母親ときょうだいに対して聞き取りを行った。また、きょうだいの各年齢段階別に就学前(0～6歳)・小学校低学年(7～9歳)・小学校高学年(10～12歳)・中学校(13～15歳)・高校(16～18歳)・現在(19歳以降)に区切り、各時期の出来事や思いについて面接を進めた。

(結果)今回はきょうだいの同胞の障害に対する思いや悩みに関して分析した。きょうだいと同胞の性別、上下を含め同胞からみた年齢差をTable1に示す。事例数が限られているため、すべての条件を比較するには困難であったが、各条件でみられた共通特徴や相違点を各年齢時期別で示す。

Table1 きょうだいと同胞の性別と年齢差

age	male/male	mele/female	female/female	female/mele
+5 <	S7,		S10	S3,S6
-5 <	S15			
+5	S1,S5, S12,S13	S8	S11	S2
-5		S9,S16		S4,S14

就学前(0～6歳):年齢差+5<群に関しては、同胞がまだ生まれておらず、-5<群はきょうだいがまだ生まれていなかった。

±5群については2事例がまだ同胞が生まれていなかった。-5群の5事例に関しては、「一緒に遊んでいてもこんなものか(これが普通)と思っていた」などと同胞の障害を意識していなかった。+5群については同胞が生まれて間もないことから同胞の障害について気づかない事例が4事例もあった。

小学校低学年(7～9歳):この時期は周りの事が分かり始める時期である。+群に関しては同胞の障害については9事例がすでに気づいていた。これらの事例は、母親が同胞を心配している様子から気づいた事例や周りの人の同胞に対する視線から気づいた事例が特徴的であった。また、母親から同胞の障害について話を聞いたという事例もあったが自閉症の具体的理解ではなく漠然としたものであった。さらに、同胞の障害に対する理解が不十分な為、将来に不安を感じていた事例もあった。これは徐々に自閉症の知識が増え、年々解消して

いった。+群残りの2事例はまだ同胞が生まれていないか生まれて間もない事例である。-群に関しては小学校に入っただけで同胞が違ふと思った事例があった。また、同じ小学校へ通えないことも不思議に思わなかったなどと同胞の障害を自然に受け入れられているのが特徴的であった。5事例中2事例が同じ小学校に通っていたが、きょうだい自身、いじめられるかもという不安はあったが、先に同胞が小学校に入学していることから周りの配慮が整っており、いじめられることもなかった。

小学校高学年(10～12歳):+群のまだ同胞の障害について気づいていない2事例に関して、同胞の障害に気づくが、大きくなったら治ると思っていたなどと障害については深く考えていなかった。残りの9事例に関しては同じ小学校へ同胞は通えないことを認識しており、同じ小学校へ通えた事例7事例中5事例が同じ小学校に通えてうれしかったと言っている。2事例に関しては、同胞がいることでいじめられたり、朝礼時に同胞が騒ぐことで恥ずかしい思いをしたなど周りの人の同胞の障害に対する理解不足により悩んでいたという事例である。-群においては性差がみられた。きょうだい男性(弟)の場合は、同胞と一緒にいる時の周りの視線は気にしていないのに対し、女性(妹)の場合は、妹なのにしっかり同胞の面倒をみているというような周りの視線に優越感を感じていた。

中学校(13～15歳):+群に関しては3事例が弁論大会で同胞の障害について発表していたり、自閉症とは何かと本を探したなど、今まで自閉症というものを毎日見て知ってはいたが、自閉症の意味概念について調べるのが特徴的であった。また、-群に関しては、同胞の障害について関心を持つより、同胞は同胞、きょうだいはきょうだいの生活を送っていたのが特徴的であった。

高校(16～18歳):-群においては、同胞が作業所など就職しており、同胞ときょうだいとの関わりは少なくなっていた。+群に関しては同胞と毎日接していて、医療・福祉・教育などの分野に興味をもち、進学した事例が11事例中5事例あった。現在:-群のうち4事例が親亡き後の問題について今は考えられないと答えたのが特徴的であった。+群は同胞の面倒をみなければときょうだいが思っている事例は4事例、きょうだいが施設に入所させると考えているのは3事例、まだ考えられない事例が1事例、面倒をみないというのは1事例であった。

(考察)以上の結果から、年上のきょうだいに関しては進学・就職・結婚などの人生の節目のときに同胞の障害に向き合う傾向であった。さらにSellingman(1989)が述べているように、同胞の障害がきょうだいの職業選択にも影響を与えることもあるということが示された。妹に関しては、西村(1995)で述べられているように本研究でも出生順位とは違う役割の逆転が起きていた。年下のきょうだいにおいては、自閉症という意味概念を十分に理解できるには時間がかかるということも示された。

ODA Noriko INOUE Masahiko MATSUOKA Miyuki